

- 1 はじめに
- 17 **「アートの日」について**
- 18 先生方と保護者へのメッセージ
「アートの日」は人を育てる
—すべては美術館との出会いつながりから—— 富林純子
- 21 「アートの日」とは？

- 2
- 23 **鑑賞**
—美術館で、就学前施設で
- 24 案内の流れ
- 28 鑑賞プログラム
- レシピ1 お気に入りを探そう
- レシピ2 賞をプレゼント、カードあそび
- レシピ3 ヤッピーネとお話づくり
- レシピ4 まねっこあそび
- 実践事例 子どもたちとアートとの出会い—— 太田浩資
- 実践事例 美術館って身近なもの—— 井上憲哉
- 38 **子どもたちの鑑賞のようすから**
- 44 **解説** 就学前の子どもたちと鑑賞を楽しむ—— 森 芳功



3

51 鑑賞+造形

—美術館で、就学前施設で

52 鑑賞+造形プログラム

レシピ1 イヴ・クラインの作品鑑賞とボディプリント

実践事例 「これでもいい?」から

「みてみてーやってみたよ」へ—— 中元美佳

実践事例 「人」をテーマに

—運動会のクラス旗をつくろう—— 森本裕子

レシピ2 絵と絵をつなげてお話をつくろう

レシピ3 マティスの作品鑑賞でつくる絵

実践事例 マティスってみる—— 福原朋美

レシピ4 墨であそぼう

実践事例 シュロのほうきで描く墨絵—— 山崎幸子

レシピ5 日本画の絵の具でお絵かき

レシピ6 透明水彩で色あそび

73 発展的な事例

「人」をテーマに 夏まつりに「わくわくタウン」をつくろう—— 森本裕子

75 解説 子どもの成長や

関心とつながる「鑑賞+造形」の活動—— 森 芳功



4

79 造形

—美術館で、就学前施設で

80 造形プログラム

レシピ1 シュレッター粘土をつくろう

実践事例 「アートの日」に出会って(シュレッター粘土)—— 筒井明美

実践事例 アートの可能性は無限大

—シュレッター粘土が結び付けたものとは—— 梅岡慶子、田中美咲

レシピ2 シャボン玉アート

92 発展的な事例 素材あそびってたのしい!! —— 井上佳子

99 発展的な事例 心と心が合わさったモザイクアート

(幼稚園・保育所共同作品)—— 近藤恵子

100 造形プログラム 自然・環境・場所を生かした表現活動

実践事例 石ころアート

実践事例 魔法の水絵の具—大地(園庭)はキャンバス—— 岸上 学

106 解説 素材研究からひろがる「造形」の活動—— 亀井幸子



5

109 これから取り組む先生へ

110 「アートの日」年間計画

レシピ 年間計画の立て方

年間計画表の例

2018年「アートの日」日記—— 北濱道子

「アートの日」の設定と年間計画

—これから取り組む先生へ—— 船本孝子

122 「アートの日」勉強会・研修会

「アートの日」の体験

—保育士、保育教諭会研修より—— 寺西恵美子



6

129 先生方の活動レポート

130 「アートの日」

—美術館とのすてきな出会いそして絆—— 中野伊久子

132 「アートの日」を通してのつながり—— 宇田 泰

136 「アートの日」を経験して

—美術館イベントサポーターとして—— 細川和子

138 一人一人の表現を大切にすること

—褒められた記憶が蘇った瞬間—— 和渕幸枝

140 Mちゃんの開花(成長)していく姿って最高!!—— 岸上 学

145 共に育ち合う仲間づくりをめざして

—「アートの日」の取り組みから—— 好岡文恵

149 アートの楽しさ届けたい!

—心動く原体験—— 田中 育美

152 三人の心の成長

—「アートの日」の活動を通して—— 和渕幸枝

154 子どもを通して気付いた大切なこと

—保護者の立場から—— 岸上佐和子

156 近代美術館の歌ができるまで—— 久米絵里子

159 「目から鱗」のアート体験—— 佐々木 晃

161 地域の美術館と子どもたち—— 東浦博史



7

163 論考・報告

- 164 子供の絵を見ること、
子供が絵を見ること——松岡宏明

- 170 音楽と美術と子どもたち
—領域「表現」の教科横断的な活動と
その基盤としての「身体」——高木 夏奈子

- 176 「アートの日」と
ユニバーサル美術館事業の取り組みから——亀井幸子

- 182 就学前の子どもたちの成長と美術鑑賞——森 芳功



8

195 資料

- 196 徳島県立近代美術館の
就学前施設との連携事業
- 200 減免申請書、出前授業依頼書、
講師派遣依頼書の様式
- 201 就学前の子どもたちに
アートの楽しさを届けるプロジェクト



3 鑑賞＋造形

—美術館で、就学前施設で

鑑賞とつなげた造形プログラムは、美術館と就学前施設が連携することでワクワクした楽しい活動となっています。子どもたちは、様々な作品から刺激を受け、制作に活かしています。子どもたちの感じ方を尊重しながら鑑賞を進めると、制作に向かう意欲や関心を高めることができるだけでなく、一人一人の個性を活かす表現につながっていきます。

「鑑賞＋造形」プログラムは、いろいろな可能性のある方法ですが、ここでは身体を使うボディプリント、版画や墨、水彩画といった、技法・素材と関わるものを選びました。レシピには、活動の流れだけでなく、お薦めの年齢、用意する道具や材料も記してありますので参考にしてください。実践のイメージをつかむために、先生方の実践例、発展的な実践の報告や解説も掲載しましたのでご覧ください。





イヴ・クラインの作品鑑賞とボディプリント

イヴ・クラインの作品〈空気の建築:ANT 119〉(徳島県立近代美術館蔵)を題材にした鑑賞と造形活動が一体となったプログラム「ボディプリント」を紹介します。イヴ・クラインは、モデルの女性の体に青い絵の具を塗り紙の上に押しつけ、さらにその上からスプレーで絵の具を吹き付け、体の形を白く型抜きしてこの作品を制作しました。その表現方法を、手や顔、身近な道具をプリントした紙芝居で楽しみながら理解。そして、実際に体に描くボディペインティングで遊んだ後、紙に体を押し付けてプリントします。

先生たちにとっても、イヴ・クラインの作品を子どもたちと鑑賞し造形活動を楽しむことで、「絵は筆で描くもの」「アートは難しいもの」といったそれまでの型にはまった考え方が揺らぎ、美術について改めて考える機会になるのではないのでしょうか。

-
- 年齢 3～5歳児
 - 活動場所 屋外(汚れても良い状態にしたベランダや園庭など)
 - 時間 4、5歳児は、鑑賞(紙芝居と掛図の鑑賞30分)と造形活動(ボディペインティングとボディプリント60分程度)
3歳児は、鑑賞と活動は分けて行うなど子どもの実態に合わせて無理のないように計画する。
 - 用意するもの 鑑賞—紙芝居、イヴ・クラインの作品掛図
造形—ボディペインティング用の絵の具(手作りする場合はカセットコンロ、鍋、片栗粉、水、たらい、バケツ等)、子どもの全身が入るくらいの大きさの模造紙や障子紙など
-

作品鑑賞

イヴ・クライン〈空気の建築:ANT 119〉の掛図を使って「おしゃべり鑑賞」をして楽しめます。

[レシピ] イヴ・クラインの作品鑑賞とボディプリント

紙芝居「空を飛んだ画家 イヴ・クライン」を見る

身近な道具や体の一部に絵の具を塗って写し取ったり、型紙などを使ってスパッタリング*した紙芝居を見て、イメージを広げたりして作品の技法を理解します。*金網とブラシなどを使って、霧状の絵の具を画面に定着させる技法。



身体のどこをうつしたのかな?



どうやって表したのか考え中

ボディ ペインティング

自分の体に絵の具を塗って遊びます。手が汚れるのが苦手な子には、無理をせず、指先に絵の具を付けて紙にペタペタして遊びます。



筆で塗ると気持ちいいよ

ボディ プリント

絵の具でたっぷり遊んだ後は、自分の体の形を紙に写し取ります。紙の上に寝てぺたっとしたり、体の上に紙をのせてペタペタしたり写し方はいろいろです。



友だちと協力して紙の上に体を写し取っている様子



絵の具のついた体の上に紙をのせて、友だちや先生がやさしくタッチ



思い思いのポーズでペタッ

1

[レシピ] イヴ・クラインの作品鑑賞とボディプリント

[ボディペインティング用絵の具の作り方]

- ① 鍋に水3リットル、片栗粉250ccを入れ沸かす。
- ② 木ベラで鍋底から混ぜながらとろみが付くのを待つ
- ③ とろみがついてきたら弱火にして絵の具を入れる。
- ④ 混ぜるとかきたま汁のようになるが、
ゆっくり丁寧に混ぜていくとだんだんじんじんでくる。
- ⑤ できあがり
- ⑥ 大きなたらいに入れて一晩冷ます。

[ポイント・コツ]

- 鍋の中の絵の具は濃く見えるので、紙に塗って試しておくといよい。
- 前日準備を行っておくことで当日は子どもも保育者も思いっきり楽しめる。
- 片づけは5歳児と! たらいを洗ったり、
片栗粉の固まりを大事に拾ったりと楽しむ子もいますよ。

□発展として

美術館での作品鑑賞

クライン〈空気の建築;ANT 119〉は徳島県立近代美術館の所蔵作品ですが、展示替えがあるためいつも飾られているわけではありません。チャンスをみつけてぜひ本物の作品を鑑賞して欲しいと思います。



展示室での子どもたちのようす

展示室での子どもたちのようす

この作品を美術館に来て見つけると「これ、知ってる!」「前(掛図を見たとき)と違うものが見えてきた!」と作品の前で話が弾みます。絵の具の感触やにおいを思い出した子もいました。「どうして青色だけで絵を描いたの?何か悲しいことがあったの?」と学芸員に質問した子もいました。作品を身近に感じ、作者へ思いを巡らせていたのでしょう。



「これしてもいい?」から 「みてみてーやってみたよ」へ

中元美佳 (徳島市立内町保育所 副所長)

2018年、夏のある日、子どもの体の横幅2倍くらいの大きな紙を床に敷くと、「なにになに〜、なににするん??」と5歳児年長の子どもたち。「明日の遊ぶ準備をさくらぐみさんとしまーす」と次の日に行うボディプリントの話をし、その準備では大きな紙に一人ずつポーズをとって寝そべり、お友だちと2人組になってその体の形をマジックで縁取りし合うことや、先生たちはボディプリントで使う絵の具を水溶性片栗粉で煮ていーっぱい作っていることを伝えました。



「はやくやりたい!」と保育者の話を真剣に聞き、イメージを膨らませワクワクした表情の子どもたちは早速2人1組で動き出します。

一人が大きな紙の上に寝そべってポーズを取ると、「じっとおってよ、かくよー」「きゃーなんかこそばいわー(くすぐったいわ)!ハハハハハハ」とマジックを勇ましく握り縁取りをし始めるペアのお友だち。リズム室には笑い声を響かせながら、ポーズを描く子どもたちが広がっていました。

保育者の前日準備

大人しか入らない安全スペースのベランダでは、カセットコンロの上に調理室からもらったお古の大鍋!鍋に水溶性片栗粉を入れてトロミがついたら絵の具を入れて混ぜ混ぜ〜♪

好みの色になるまで、まるでクッキングをしているよう。はじめてボディプリントの絵の具作りを体験する保育者も多く、順番に作りに来た保育者にやり方を伝授していく姿も楽しそう。「私、もう作れるようになったよ」と笑顔が繋がっていきます。

大きなたらいにタップタプの絵の具ができ、「うん、これで明日はおもいっきり遊べるなあ」と保育者同士でニヤリ。あらためて保育の準備というものがこんなに楽しいものかと共感!大満足!の瞬間でした。



活動当日

「なんじからするん?」と子どもたちは朝の集会の時からワクワクが止まらない様子。いよいよ、朝の活動が終わり、着替えを終えた子からグリーンガーデンへ。準備したのは保育士が作ったたらいの中のブルブルンの絵の具、筆、刷毛、ローラー、小さなバケツ等々。準備を待つ間も、「わたしふでつかいたい」「ばく、ローラー」と、キラキラした目とおしゃべりの口がもう止まらない!



「今日の遊び方は何の道具を使ってもいいこと、体でも顔でもどこにでも絵の具をぬってもいいこと、とにかく思いっきり楽しんでいいこと」を伝え、そして、「思いっきりボディペインティングを楽しんだ後は昨日描いた自分の体の線の中にもう一度ポーズ通りに寝そべって色をつけましょう」の言葉を合

図に、いろいろな道具を使い絵の具を触り始めた子どもたち。

「キャーつめたくてきもちいい」「ぬるぬる～」「ぬってあげる」と友だちといろいろ試し、「あ、こんないろになった」「すごー!」と色の変化を実験し始める子も!透明感のある片栗粉入り絵の具の色や感触を夢中で楽しんでいるうちに、遊びがどんどん広がっていきました。

5歳児の子どもたちが遊び始めると間もなく3歳児、4歳児の子どもたちも参加し始めました。年長児の遊ぶ姿に目を丸くしながらも真似て、感触遊びに歓声をあげる子どもたち。5歳児は、そんな姿を見て年下の子に絵の具や道具を分けてあげたり、色の変化を一緒に試したりして共感し合う姿が見られました。

S君

はじめて出会う感触に緊張して「て、だけでもいい?」と告げに来るS君。「いいよ、手だけでも気持ちいいし、ポーズを型どった紙に何を使って色をつけてもいいよ」と話すと安心したかのように、「はい、じゃ、てと、ふでとでぬってみるう」と夢中で何回も何回も手や筆に絵の具をつけて自分の体のポーズに色を付ける姿が。しばらくすると「みてみて、できたよ。ここがおなかなかんよ～ハハハ」と誇らしげに伝えに来たS君。

I君

「せんせいみてみて～」という声に振り向くとI君がローラーにたっぶりの絵の具をつけて顔の上を何往復もして顔全体に塗ろうとしています。保育者は思わず顔を見合わせて大爆笑!凹凸のある顔にローラーで塗りたいくろうと必死な姿に、友だちや保育者から「!くんすごーい!おもしろーい」と言葉をかけてもらい大満



足な表情。もちろんI君はあっという間につま先から顔まで絵の具だらけになり、大きな紙のポーズの型へ「にんげんスタンプ!」とダイナミックに飛び込み、思いのままに絵の具で遊びこむ開放的な姿にまわりのお友だちも「!くんすごーい、わたしもスタンプする!」と感化されて真似をする子、ちょっぴり大胆に遊ぼうとする子、と発展していきました。

感触遊びがちょっぴり苦手な子も大好きな子も、思うがままに遊びこむことができたボディプリント。日頃の保育活動のなかでは、子どもたちが「〇〇やりたい」「やってみたい」と思う気持ちの前に、「約束は～」「ルールは～」と何らかの制限を伝えてしまうことがあります。それは安全に過ごしてほしいという保育者の願いでもあるのですが、子どもの行動を管理してしまっていることもあります。今回のボディプリントでは、ルールにとらわれがちな日頃の保育を振り返られるくらい、子どもたちは開放的に全身で遊び、また保育者も「どんな遊び方でもいいよ」と思えるくらい絵の具だらけになり、大人も子どもとともに楽しむことができました。自由だからこそ子どもは友だちや物との関わりのなかでいろいろなことを感じ、そこで考え、新しい秩序を生み出しています。そんな瞬間が子どもにも保育者にも実感できたボディプリントでした。

(なかもと みか)



「人」をテーマに

一運動会のクラス旗をつくろう(5歳児)

森本裕子 (徳島市立八万保育所)

ボティプリントを楽しもう 2015年9月

はじめは絵の具の感触に「うわあ～」と大声を出したり、「ぬるぬるする～」と恐る恐る手に付けたりしていた子どもたちは、自分の腕や足に絵の具を伸ばしたり、友だちと塗りあったり、だんだんダイナミックになっていきました。身体中が絵の具に染まった子どもたちは、大きな紙に寝っ転がって人型をとり、自分の身体を感じました。

そのあと、プールに飛び込むとプールの水がどんどん紫色になり、みんな「おんせんみたい」「いいにおいがするかも…」といったもと違うプール遊びを楽しみました。



人型をとって運動会のクラス旗を作ろう

送迎時、保護者に子どもの身体の型をとってもらいました。保護者は紙いっぱいに寝転んでポーズを決める我が子の姿に、大きく成長したことを実感していました。また、子どもたちは「くすぐったい～」と満面の笑顔を見せ、保護者は「ちょっと、じっとしててね」と子どもに声をかけながら型をとり、親子で心地よさを感じているようでした。



人型に色を付けよう

スポンジや筆を使って人型に色付けをしました。色を塗っている時、「おかあちゃんがここがむずかしいっていいったんよ」、「ここがくすぐったかったんよ」「ママがおおきくなったなあといってくれた」など保護者との会話を思い出し、友だちと楽しみながら塗っていました。



運動会でクラス旗を飾ろう

きれいに色付けされた一人一人の絵を貼り合わせて、一枚の大きなクラス旗が出来上がりました。子どもたちは「すごい」「おっさいなあ」「ここにぼくがある」「〇〇くんがここにおる」と大騒ぎ。

一人一人が「アートの日」を楽しみ、そこでの表現が認められたことが自信や友だち関係の深まりにつながりました。運動会当日は、みんなで作った旗の前で力を発揮しました。保護者や会場の方からも大きな声援と拍手をいただき、子どもたちは「すてきななかま」とともに「うれしい!たのしい!だいすき!」を実感した日となりました。



(もりもと ゆうこ)



絵と絵をつなげてお話をつくろう

元永定正さんの作品を題材にした鑑賞シート「えのほんをつくろう」を使った活動を紹介します。鑑賞シートは、主に小学校や中学校の授業で使うための鑑賞教材として徳島県立近代美術館が発行しているものです。「えのほんをつくろう」では、元永さんの絵からお話をつくり、そのお話をつなげて簡単な絵の本を作ることができます。

まだ文字が書けなくても、絵を見て思ったことや感じたことを話したり、好きな絵を選んだり、鑑賞シートを使ってできることはたくさんあります。自分だけの絵の本を作ってみましょう。鑑賞シートは活動に必要な枚数を無償でお渡しできます。美術館までお問い合わせください。

- 年齢 5歳児
- 時間 60分ぐらい
(元永作品の鑑賞と
絵の本づくり)
- 用意するもの 掛図、
鑑賞シート「絵の本をつくろう」、
はさみ、マジックや色鉛筆など



作品の鑑賞から

掛図や鑑賞シートを使って行います。

やり方はシートに書いてありますので、それに従って進めます。

まず、〈のびるしろ〉から想像してみましょう。

「ある朝、空を見上げると()がうかんでいた…」

絵を見て感じた自由な発想で、()に入る言葉を考えます。

「ぼうしのお化け」「おもちゃみたい」「宇宙船かも…」。

子どもたちは、いろいろなものを思い浮かべます。

2

「レシピ」絵と絵をつなげてお話をつくろう

お話をつなげてみる

〈のびるしろ〉につながる絵を選び、お話を考えてみます。先に考えた()が、絵の中でどのように変化していくか、3枚の中からつながりそうな1枚を選び、お話を考えます。形や色に着目すると、考えやすくなるでしょう。



「宇宙船が飛んで行ったら、不思議な宇宙人がいた」

「うん、うんそれで次はどうなるの?」と、子どものお話を聞いてあげましょう。

4枚の作品を選ぶ

鑑賞シートのp.2～3の絵を点線に沿って絵を切り抜き、カードを作ります。

その中からお話に使いたい絵を4枚選び、お話を考えてみます。

お話を考えながら絵を選んでもいいですし、選んでからお話を考えてもいいです。いろいろなやり方があるでしょう。



絵のカードを本の台紙に貼る

お話ができれば、絵のカードを貼り付け、完成したお話を聞かせてもらいましょう。先生やおうちの人、下の枠にお話を書き込んであげると、他の人も読むことができます。



2

[レシピ] 絵と絵をつなげてお話をつくろう

表紙の絵を描く

題名を考えたり、表紙の絵を描いたりして、絵の本を仕上げましょう。

できた絵本を読み合う

友だちや先生と見せ合ったり、グループになって交代で読み聞かせをしたりするのも楽しいです。家に持ち帰り、家族にも紹介しましょう



やってみようと思う先生へ

お話はできても、文字で書くことが難しい場合は、大人が聞き取って書いてあげるといいでしょう。また、お話にしなくても、4枚選んだ絵にそれぞれ自分なりの題名を付けたり、聞こえてきそうな音やおしゃべりを考えたりして絵の本を完成させても楽しいと思います。お話を言葉で考えるのが難しい年齢の子どもたちと行うときは、好きな絵を選んで貼るだけでも楽しいですし、どうしてその作品を選んだのかを聞いてあげるうちに、お話が生まれてくるかもしれません。

親子参観日などで保護者と一緒に活動する機会には、子どもが好きな絵を選び、保護者がお話を考えたり、子どもと一緒に考えたりしてみても楽しいと思います。

完成したら絵本を読み合い、その子らしい個性や見方を感じ合う活動を大切にしてください。

参考資料 「鑑賞シート 指導の手引」PDF版えのほんをつくろう」は
徳島県立近代美術館のホームページ 「がっこうのページ」からご覧いただけます。
https://art.tokushima-ec.ed.jp/gakko/tebiki11_enohon.pdf



マチスの作品鑑賞でつくる絵

フランスの画家アンリ・マチスは、晩年になってから切り紙による絵の制作に力を注ぎました。色を塗った紙を筆で描くようにはさみで切り抜き、それらの紙片を組み合わせて作品を作っています。版画集〈ジャズ〉は、そのようにして作られた絵をステンシルの版画にしたものです。明るく色鮮やかで自由な雰囲気の作品は、子どもたちの想像力をふくらませるでしょう。同じ作品でも、いろいろな動物に見えたり、激しく踊っている人にも見えたりして、様々な見方や感じ方に出会うことができるとも楽しい鑑賞活動になると思います。

鑑賞した後は、マチスと同じように色紙を好きな形に切り台紙に配置してみます。下絵は書かず、何かの形に切り抜くことにこだわらず、手の動くまま自由に色紙を切ってみるとよいでしょう。それらの紙片を組み合わせて作品をつくります。手元で夢中になってつくった作品を壁に貼るなどして少し離れて見てみると、思いがけない発見があるものです。



- 年齢 4,5歳児
- 時間 作品鑑賞(40分程度)、制作(50分程度)
- 用意するもの 作品(版画集〈ジャズ〉)の掛図や画集、色紙、台紙用の色画用紙など、はさみ、のり

マチスの作品鑑賞

美術館見学時に鑑賞します。作品が展示されていないときや保育所で活動するときは、掛図やマチスの画集を使って鑑賞します。

切り紙で絵をつくる

つくりかた

- 好きな色の折り紙を選びます。
- はさみで自由にいろいろな形に切ります。
- 切った紙をいろいろと並べ替えてみます。
- 気に入った配置が決まったら台紙に糊で貼ります。



作品に題名をつける

マチスの作品を鑑賞したときのように自由にイメージを広げ、自分の作品に題名をつけます。



マティスってみる

福原朋美（論田ひまわり保育園）



- 年齢 5歳児
- 参加人数 17人
- 活動場所 美術館と保育所（美術館見学の時にマティスの作品を鑑賞。後日、保育所で造形化活動を実施）
- 活動時期 2017年9月
- 活動のねらい 美術館で好きなマティスの作品を見つける。作品の色や形を手がかりにして、自分なりに楽しく切り紙で絵をつくる。

「この作品のどこが好き？」

美術館でアンリ・マティスの作品を見ていろんなお話をしました。気に入った作品の前に自分のカードを置いて、どこが好きか、何を見つけたか、みんなに発表しました。

保育所に帰ってからは、マティスの画集をみんなで見て美術館の作品を振り返ったり、作品を自分なりに見立てたりして楽しみました。

「じゃあみんなもマティスってみよう！」

材料は色画用紙と折り紙シールを使いました。折り紙シールと台紙の色を選び、イメージした形に切り取って貼り付けたり、偶然にできた形からイメージしたりして作品をつくりました。作品に題名もつけました。

子どもたちの活動の様子

マティスの作品に影響を受け葉っぱを切り抜こうとした子や、イメージして切り取った形よりも余った形のほうが気になりそれを作品にしてしまう子など、インスピレーションで作り楽しんでいる様子がみられました。

活動の振り返り 次につなげたい活動など

美術館でのアート作品に触れ感想を述べあう際に発想の自由さやそれを認めてもらうことの嬉しさを、作品を作ることでも感じてほしいと思いました。子どもたちは、作品を部屋に飾っている間中、楽しんで活動できたことや作品と題名の組み合わせなどを話題にして楽しんでいました。

5歳児の活動では、自由な発想で色紙を切り取り、組み合わせを考えて貼っていましたが、各年齢に応じて楽しむ工夫ができると思いました。例えば、保育者が色紙を不思議な形に切っておいて、その中から好きなものを選んで貼る活動なら2歳でもできると思います。偶然から生まれる面白さみたいなものをもっと楽しめればと思います。

（ふくはら ともみ）





墨であそぼう

「墨と紙が生み出す美の世界」(2012年)のときから実践しているプログラムです。実際の作品あるいは図版で鑑賞をした後、硯で墨を磨り、^{すずり}す ^{にじ}滲みを体験したり、絵を描いたりします。

墨の種類(松煙墨^{しょうえんぼく}、油煙墨^{ゆえんぼく})によって微妙に色が違いますし、面白い滲みあそびができますので、子どもたちは時間を忘れて取り組んでくれます。墨を磨ったことがない子どもにとって、背筋をピンと伸ばして墨を磨るのは新鮮な体験となるようです。墨の香りも知ることができ、短い時間のなかで多様な墨の魅力に触れることができます。

その後、少し大きな紙に大胆な線と濃淡で描く子どもたちの作品を見てみると、大人の気持ちを「写実」から解き放ってくれるところがあるように思えます。また、発展的な実践事例「シュロのぼうきで描く墨絵」のように、墨であそぶ大胆な実践も生まれています。

なお、このレシピは3歳児以上を想定していますが、墨の表現は年齢に応じて楽しめます。1歳児の実践例も掲載しましたので、先生方のアイデアでいろいろと展開していただけたらと思います。

-
- 年齢 3歳児から
 - 時間 4歳児で鑑賞40分、滲みあそびとお絵かき60分程度
 - 用意するもの 硯と墨(4人に1つ)、筆2種類(各自)、小皿(各自)、
筆洗(各自)、書道用下敷き(各自)、
滲みあそびがしやすい紙(各自)
-

水墨画の鑑賞

^{ちょうじゅうぎ}鳥獣戯画 ^{せつしゅう}雪舟 ^{しょうはく}蕭白 ^{じゃくちゅう}若冲 から近現代の水墨画まで、図版をいくつか用意し、「おしゃべり鑑賞」をして楽しめます。



4

[レシピ] 墨であそぼう

墨の磨り方の説明

美術館で活動するときはアトリエへ。就学前施設では、お部屋に机を並べて制作ができるようにします。準備ができたら説明です。

- 硯は墨を磨る手の近くに、「海」が向こう側となるように置きます。
- 背筋をピンとして姿勢よくします。
- 水を少し入れ、硯の「陸」のところで、やさしく動かします。
- 墨が「とろっ」とするまで磨りましょう。



何人かのグループのなかで交代して磨っても楽しいです。「茶色になってきた!」「青くなってきた!」など、微妙な墨色を見分ける子も出てきます。

にし 滲みあそび

滲みやすい紙を用意し、いよいよ制作です。

書道用品店に問い合わせて、ふつうに手に入る画宣紙や和紙などで試してみてください。

- つるつるしている方が表です。でも、滲み止めが塗ってあると滲みませんので紙の選択のとき注意してください。

- 2種類の筆、水を入れた小皿を一人ずつに配ります。

実演をしながら滲みあそびの説明をしますので、みんなに集まってもらいます。

- 面相筆に墨をつけて、紙に小さな丸を描きます。

もう一本の少し太い筆に水をつけ、その丸のなかに水を含ませていきます。すると、墨が滲みだし、お花のような形が広がっていきます。花火の形もできます。

4

「レシピ」墨であそぼう

説明が終わったら、席に戻って一人一人制作です。きれいな花や花火の形をつくる子も、真っ黒にする子もいます。真っ黒な絵でも、乾くと味わいのある墨絵になっています。そこが墨あそびの面白さです。



少し大きな紙でお絵かき

次は墨で自由なお絵かきです。墨線を大胆に走らせてもいいですし、好きな絵を描いてもいいと思います。いつもと同じように描いても、墨の滲みや濃淡の効果によって、思いもよらない表現が生まれます。

●小皿を用意して、濃い墨、薄い墨、(時間があれば中ぐらいの濃さの墨も)を用意しておくで描きやすいです。

●濃い線、中ぐらいの濃さの線、
薄い線を試し描きしてからはじめるといいでしょう。



振り返り

- 紙が乾いたら、墨色の違いがよく分かりますので、違いを確認します。
- よかったところをお話します。
- お片付けも大事です。

子どもたちの鑑賞のようすから

背筋が伸びて真剣な表情

固形の墨を触ったとき、においを嗅いだとき、「なんかおいしそうなおいがする」。磨って斜めになったところを触って、「ここツルツルやなあ」。墨を磨っているとき、「さっき(固形の墨を手にしたとき)よりも、もっといいにおいがするよ」。

今まで机にもたれたり、他のお友だちの机に行ったりしていた子どもたちが、筆を持って絵を描きはじめる
と、背筋が伸びて真剣な顔になった。

(2、3歳児クラス 徳島市立明善保育所 2018年10月)

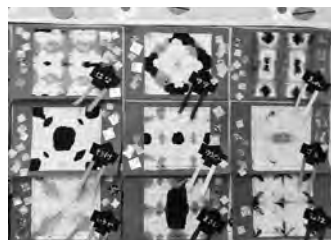
「うぁ!!」と驚きの声

滲み絵の描き方について教わっているとき、興味しんしんでのぞき込んでいた子どもたちは、墨が広がる
ようすに、「うぁ!!」と驚きの声をあげていました。

(4、5歳児クラス 徳島市立明善保育所 2018年10月)

「1歳児でもできちゃう墨あそび」

先生がいろいろな形に折った紙の中から好きなものを選びました。紙のはしっこを上手につまんで、濃い
墨や薄い墨につけて染みこませます。紙を広げてみるといろいろな模様が現れました。



(1歳児クラス おおぎ認定こども園 2019年1月)



シュロのほうきで描く墨絵

山崎幸子 (徳島市立明善保育所)

○年齢 4、5歳児

○参加人数 10人

○活動場所 園庭

○活動時期 2018年10月



活動のねらい

- シュロのほうきを使って、墨絵を描く面白さを知る。
- みんなで大きな絵を描くことに一人一人が携わり、一体感を感じる。

活動内容

- シュロのほうきに墨をつけて、大きな紙にみんなで描く。
- まず、一人一人、濃い目の墨汁で描き、次に薄めた墨汁で描く。

子どもたちの活動のようす

- はじめは、恐る恐るほうきでなぞるように描く子もあり、ゆっくりと試している様子でしたが、一人の子がほうきを上から思いっきり振り下ろすと、ダイナミックな模様ができたので、皆が注目しました。次第に雰囲気 が和み、2回目には、多くの子のほうきを動かす勢いに変化しました。
- 保育所で普段からほうきを持って汚れているところを掃除するのが大好きなS君は、シュロのほうきでの制作に興味をもったのか、自分の 順番まで機嫌よく待ち、順番がくると、いつも掃除をしているように、ほう きで生き生きと描いていました。墨がかすれてくると、自分で墨を付けに きて描く、ということを何度も繰り返していました。



活動の振り返り 次につなげたい活動など

- あえてテーマを決めずに描いてみたので、純粹にこの素材で描くことを楽しめたように思います。
- 皆で描き重ねていって偶然できた絵を、後日じっくり鑑賞して、「何に見えるかな?」などと尋ねながら、イ メージを広げたり、発見したりすることを楽しみたいと思います。

(やまさき さちこ)



日本画の絵の具でお絵かき

日本画の展覧会（「^{ひろしまこうほ}広島晃南回顧展」、「^{くさか はっこう}日下八光日本画展」など）のとき、子どもたちを楽しんでもらいました。展覧会や掛図で日本画を鑑賞した後、日本画の絵の具を^{にかわ}膠などで固めた「^{がんさい}顔彩」を使ってお絵かきをします。チューブに入った水彩絵の具とは、絵の具の形態だけでなく発色が違い、濃淡もうまく表現できます。色の美しさに惹かれて、夢中になって描く子どもたちの姿に触れることができるプログラムです。

ちなみに、顔彩は、粒子の細かな^{すいひ}水干絵の具を固めたものです。日本画では、他に粒子の粗い^{いわ}岩絵の具を用います。

このレシピは、筆をまっすぐ立てて線が引ける4歳児以上を想定しています。しかし3歳児も、体幹や運動機能が発達してくると、だんだんと筆をまっすぐ持てるようになってきます。そのような成長も実感できるプログラムかもしれません。

- 年齢 4歳児から
- 時間 4歳児で鑑賞40分、
塗り絵あそびとお絵かき60分程度
- 用意するもの 顔彩1セット（2人）、筆1本（各自）、
小皿（各自）、筆洗（各自）、紙（各自）

日本画の鑑賞

日本画作品を鑑賞します。鑑賞の後に、日本画の絵の具を使ってお絵かきすることを説明し、色に注目する時間も設けます。



絵の具と描き方の説明

「顔彩」や筆の使い方の説明をします。

●色の名前は水彩と違って、赤にも「えんじ色」や「さんご色」など、いろいろあることを話します。

5

[レシピ] 日本画の絵の具でお絵かき

●筆の説明では、イタチの毛など材質にも触れ、やさしく立てて使うことを話します。細い線を引くのが面相筆です。最初に、絵の具をつけていない筆をまっすぐ立てて持ち、紙の上で動かしてみます。



●筆に水をふくませて、顔彩の表面を2〜3回ほどなでると筆に絵の具がつきます。



●水で濃淡をつける場合は、小皿に移して濃さを調節します。

●別の色を使う場合は、筆をよく洗います。そうしないと色が混ざってしまうので、よく注意します。

塗り絵あそび

「顔彩」で塗り絵をします。鑑賞のときに観た鳥や植物の絵を簡単な線で表し、和紙や画用紙にコピーします。何種類かあると選べて楽しいかもしれません。

●濃淡をつけた表現をすると、水彩とは異なる味わいが生まれます。

●一部でいいので細い線も引いてみます。

●紙の大きさは一辺10cm程度にすると、簡単に試みることができます。

●和紙を用いると、発色や風合いがよくなります。

●紙はなめらかな方が表です。

自由にお絵かき

鉛筆で線を描き、塗り絵のときと同じように着色します。濃淡をつけると、普段描く絵とひと味違った作品が生まれます。

振り返り

○一つの机に並べると、見やすいです。

○よかったところをお話します。

○お片付けも大切です。



透明水彩で色あそび

徳島県立近代美術館では、水彩画家・三宅克己^{み やけ こつき}のまとめたコレクションがあります。このレシピは、「三宅克己回顧展」(2014年)のときに保育所の子どもたちに体験してもらい、以後、折に触れて行っています。

三宅克己は、水彩の様々な技法を追求しましたが、そのなかに透明水彩の技法があります。パレットで混色するのではなく、淡い色を塗り重ねて混色する技法です。たとえば、黄色の上に緑をのせると黄緑になります。紙の白も活かします。

就学前施設の子どもたちには、技法としてではなく、きれいな色が表れる不思議を体験させたいと思います。美術館のアトリエで制作するときは、美しい色の水彩絵の具や普段とは違う水彩用の画用紙を使うことがあります。

「レシピ4 日本画の絵の具でお絵かき」と同じように、色の印象が大きく変わる材料体験となります。その体験の後に、それぞれの題材にもとづくお絵かきにつなげていただけたらと思います。

-
- 年齢 3歳児から
 - 時間 4歳児で鑑賞40分、色あそび20分程度、
お絵かきは+α
 - 用意するもの 筆2種類(各自)、パレット(各自)、
筆洗(各自)、紙(各自)
-

水彩画の鑑賞

展覧会や掛図で水彩画を鑑賞します。鑑賞の後に、同じやり方でお絵かきすることを説明し、色に注目する時間も設けます。



描き方の説明と色あそび

紙や絵の具のこと、本時の描き方について説明します。

- 画用紙は、つるつるしている方が表です。

6

〔レシピ〕透明水彩で色あそび

紙はふつうの画用紙でもいいのですが、ワットマン紙（厚手の水彩画用紙）ですと、色がよりきれいにでます。

葉っぱや風景の輪郭線を紙にコピーし、塗り絵のようにして用いることもあります。

●パレットにずらっと並んだ色から好きな色を選び、線や好きな形を描きます。絵の具は薄く使いましょう。別の色でも同じように描きます。この描き方では、パレットで色を混ぜないでやってみます。

●絵の具が乾いてきたら、その上に別の色を薄く乗せていきます。水が多すぎると乾きにくいので注意しましょう。ヘアードライヤーを用意しておくといいかもしれません。

●別の色を使うときは、よく筆を洗うことも忘れずに。



お絵かき

色あそびが終わったら、透明水彩の描き方でお絵かきです。その時々 of 題材でお絵かきをしてみましょう。

熱中した子どもたちは、薄く塗り重ねるだけでなく、絵の具を濃く使ったり、混ぜたりしはじめるかもしれませんが、併用も悪くはありません。透明水彩の描き方、紙のうえで薄い色が重なると、別の色になる不思議を一度でも体験できたらと思います。

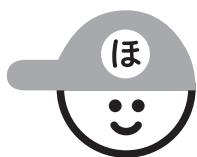
振り返り

○よかったところをお話します。

○5歳児クラスで葉っぱの色塗りをしたときは、みんなで季節（春、夏、秋、冬）順に、また風景の色塗りでは、朝から夜まで順番に並べてみると、話がはずんで楽しいかもしれません。

○お片付けも大事です。





「人」をテーマに

夏まつりに「わくわくタウン」をつくろう

森本裕子 (徳島市立八万保育所)

美術館の「人」の絵を見て感じよう

“保育所は美術館”の日(2015年6月)に「人」が描かれている掛図を持って来ていただきました。自分の好きな「人」を決めて、よく観てみます。「おこっているようにみえるけど、ぜんぜんおこってない。きんちょうしてるのかも」「おじいさんはやすみのひにゆっくりテレビをみるのかな…」。その「人」のどこが好きなのか、その「人」はどんな気持ちなのかと子どもたちは想像を膨らませながら鑑賞を楽しみました。

次に、世界中の面白い形の家の写真を見て、そこにはどんな人が住んでいるのだろうかと思像して、話し合いをしていました。



家を描こう

子どもたちは掛図の中から好きな「人」を選び、その「人」がどんな家に住んでいるかを考え、描きました。設計図のように家の中の間取りまで描き、中には車や犬小屋など、友だちととどどんアイデアを出し合って、時には見せ合って楽しく活動しました。

グループで一つの設計図を描こう

子どもたちはグループになり、グループごとに一人の「人」を決めて、その「人」が住んでいる家の設計図を描きました。はじめは一人の「人」でしたが、「ひとりだったらかわいそう」「あのひととあのこがいっしょにすんだらたのしいわ…」「ぼくも、すみたいなあ」と言いながら、お互いの設計図のいいところを組み合わせ、みんなが住める設計図作りをしていきました。



段ボールで家を作ろう

グループで段ボールを選び、切ったり、ガムテープで貼ったりしながら、土台づくりをしました。土台ができる友達と協力して色を塗ったり、画用紙や包装紙、広告紙などを貼ったりして、家を完成させました。外付け露天ぶろや自転車置き場、リビングには冷蔵庫など、夢いっぱいの家ができてあがりました。



夏まつりに「わくわくタウン」コーナーとして

みんなで作った段ボールの家を集めて「わくわくタウン」ができました。「アートの日」の取組みとして、めろん組(4歳児)は山、みかん組(3歳児)は花、ばなな組(2歳児)は空、さくらんぼ組(0・1歳児)は雲と各クラスが壁面づくりに参加しました。夏まつりに保護者や小さいクラスの友だちも「わくわくタウン」に入り楽しみました。一つ一つ丁寧に見てくださった保護者の方から、「すごいね」「素敵だね」と声をかけてもらい、子どもたちはとても嬉しそうでした。



家であそぼう

夏まつり終了後、子どもたちは、各グループの家をつなぎ合わせて大きな家を作りました。この家でままごとしたり、昼寝をしたり、小さいクラスの友だちを招待して「うちごっこ」遊びへと発展していきました。



(もりもと ゆうこ)

子どもの成長や関心とつながる 「鑑賞+造形」の活動

森 芳功 (徳島県立近代美術館)

「鑑賞+造形」は、美術館と就学前施設が連携することで、ワクワクした楽しい活動を生みだしています。子どもたちは、美術館に展示している様々な作品から刺激を受け、制作に活かすことができるからです。

「2.鑑賞」のところで紹介したように、就学前の子どもたちは、大人の常識を軽々と超えて、自由に鑑賞を楽しんでいます。そのような鑑賞がどのようにして、ワクワクした制作の時間につながるのでしょうか。

1.子どもも大人も

「写実の先入観」から自由になる

いうまでもありませんが、子どもたちの成長の過程は一人一人個性的で、同じ時期に、全員が同じような発達の姿を見せてくれるわけではありません。たとえば同じ年齢のクラスでも、人を描くときにある子は頭から足のはえた頭足人を描き、ある子は胴体に足を描くという違いが起こります。そのようなとき、隣の友だちが「じょうず」に思え、「(自分は)へた」と萎縮し、描くことに自信がもてなくなる場合もあるようです。

しかし大人は、そのような子どもの気持ちや表現のよさが分からず、「じょうず」に描かせようとしがちです。それは、知らず知らずのうちに、写実的な再現描写が評価の基準になっているからではないでしょうか。ところが、アートの世界に目を転じると、表現の世界はもっともっと多様です。美術史は、19世紀から20世紀、21世紀へと移るに従って、写実以外の多彩な表現を生み出していますし、そもそも日本で、ヨーロッパの写実的描き方を取

り入れはじめたのは、主に江戸時代後半以降のことです。

もちろん、そのようなことを学び理解しようとする、どうしてもハードルが高く感じられてしまいます。ですので、多彩で個性的なアートとの出会いをまず大切にしたいと思います。美術館見学をすると、子どもたちは展示されている作品を観て、いろいろな作品が高く評価されていることや、「へた」と思われそうな絵によさがあることが分かっていきます。そして、それらのよさを見つけるのと同じように、自身の作品のよさが認められていくのなら、友だちの作品と比べて自信をなくすことはなくなっていきます。

さて、美術館のなかでも近代・現代の美術を扱う館は、就学前の子どもたちが楽しくなる「鑑賞+造形」のプログラムを行いやすい面があるように感じています。

たとえば、レシピ1で取り上げたイヴ・クラインの作品は、モデルに絵の具をつけて魚拓のように写したり、絵の具をスプレーのように吹き付けたりして人の形を写し取っています。そのような表現方法もあるのです。それだけではありません。美術館の展示では、作品の表現方法が多様であるのに気づきます。パブロ・ピカソ〈赤い枕で眠る女〉は、一点から眺めて描くのではなく、いろいろな角度から見て眠る女性を表しています。また、割れたお皿やコップを画面に貼り付け、そこに人の顔を描いた作品(ジュリアン・シュナーベル〈マルクス〉)、殴り描きのように大胆に筆を走らせた作品(カレル・アペル〈裸婦〉)など、その多彩さは一言で語ることはできません。写実的に描かれた作品

も展示していますが、子どもたちと鑑賞するときは、他の作品と同じように、一人一人の子にとってよいと思えるところを探すようにします。

このように、アートの世界が多彩であるのを知っていくと、大人の側も、子どもたちの表現を広い視野のなかで捉え励ますことができる、余裕のようなものが得られると思うのです。

2. 本物の作品を鑑賞すると制作につなげやすい

印刷物と違って美術館で鑑賞する作品は、大きさを実感できますし、素材の違いにも気づかれます。色彩の印象も印刷物とは異なり、筆のタッチなどから画家の息づかいを感じ取ることもできます。つまり、感性的に得られる情報の量が格段に多いのです。子どもたちは、それらの情報のなかから、一人一人の心に響いたものを制作の刺激にしていきます。多くの作品を見ていくと、必ずそれを心のどこかに蓄えていて、制作に活かしていくことができるのです。

レシピ5の「日本画の絵の具でお絵かき」を美術館で行ったとき、鑑賞を行ったグループとそうでないグループでは表現に違いがあり、制作に刺激を与える鑑賞のはたらきについて再確認することができました。見学をした後に造形体験をするグループと、造形体験をしてから見学するグループに分かれ、鳥の輪郭線を入れた紙に日本画の絵の具で色塗り体験をしました。そのときの表現に違いが見られたのです。見学後に制作をしたグループは、実際の作品を味わった後なので、どの子ども色彩は豊かに多彩になります。背景を自由に

塗る傾向もありました。いくつか鳥の絵を鑑賞した後なので、自分の鳥を描こうとする子も出てきました。印象に残ったところが影響し、表現が豊かになっていったのです。「おしゃべり鑑賞」などで鑑賞活動に参加すると、一人一人が作品をじっくり見ますので、表現に与える刺激は強くなっていくように感じられました。

ちなみに、日本画の色塗り体験をした後に展覧会見学をしたグループは、美しい絵の具の色彩を体験した後なので、作品鑑賞のときにその経験が活かされ、色彩に注目する意見が多く出されました。「鑑賞＋造形」は、どちらが先でも、それぞれよさがあるようです。

3. 鑑賞と造形のつなげ方

「鑑賞＋造形」プログラムで鑑賞は、制作に向かう意欲や関心を高めるはたらきをします。「レシピ1 ボディプリント」では、イヴ・クラインの作品を鑑賞した後に、子どもたちとボディプリントをやってみます。説明のときに、クラインが自分の一番大事に思う一つの色だけを使ったことや、空を飛びたかったことなどもお話しします。子どもたちは、「おしゃべり鑑賞」で気になるところを見つけていきますし、話を聞いて自分なりに想像をはたらかせて、実際のボディプリントに入っていくことになります。もちろん、その後の表現は、身体を使った表現ですので、子どもたちにとって楽しくないはずがありません。

また、「レシピ1」では、クラスの全員でボディプリントをするため、みんなでクラインの絵を鑑賞しましたが、一人一人が自分の作品を描くときは、いろ

いろいろな作品を鑑賞するのがおすすめです。墨で絵を描く「レシピ3 墨であそぼう」では、制作の前に何点かの水墨画を鑑賞します。人によってお気に入りになる作品は違いますし、一人一人、気になるところ心惹かれる部分は異なりますので、表現に与える刺激はそれぞれ違ったものになるからです。

他の題材でも同じです。レシピにははしませんでした。5歳児クラスで、花の絵を描いたことがあります。保育所での出前授業でした。持ち込んだ掛図で花や植物の絵、きれいな色彩の絵を鑑賞した後、保育所に咲いている花や先生が持ってきてくれた花を前にして、お絵かきをしました。見て描いてもいいし、自由に描いてもいいようにしたのですが、そのとき、鑑賞した作品の色彩に影響された子、写実的な絵に刺激されてとても丁寧に写生をする子など、多様な表現が展開されました。この実践から、いろいろな絵を鑑賞した後制作するのは、関心や成長の表れが異なる子どもたちの個性を育むうえで有効なのだと感じました。

4. 材料の特徴と子どもの表現

「鑑賞+造形」プログラムのレシピには、画材に注目したものもあります。子どもたちにこそ、本物の画材を使ってほしいという思いがあるからです。墨に注目した「墨と紙が生み出す美の世界」展(2012年)の折には、墨色の違う墨(松煙墨、油煙墨)の他、半世紀以上前の中国で漉^すかれた画宣紙をしみあそびなどで使うことができました。なかなか手に入らない質の高い紙なのですが、就学前の子どもの制作に意義を感じた方から分けてもらうことができたのです。その紙はしみ方がす

ばらしく、子どもたちも他の紙と比べて「こっちがいい」といって、すぐ違いに気づいてくれました。子どもたちには、そのよさが分かるのです。

もちろんふつうに手に入るしみやすい紙でも面白い効果が生まれるのですが、質のいい材料を使うとより表現の幅が広がり、制作する人の気持ちともうまく重なっていきます。可能であれば感受性豊かな子ども時代に、できるだけいい材料を使えるようにしたいものだと思います。

ところで水墨による表現は、鉛筆と水彩で描くのとは異なった味わいがあります。形がうまく捉えられなくても、線の強弱によって意図しない表情が表れますし、濃淡で表す制約にも面白さがあります。しみあそびもそうで、墨と水、そして画宣紙の性質を活かすことで、花や花火などのイメージが浮かびあがってきます。それは、描写する能力に応じて表す写実表現と違い、偶然も関わってきますので、どこか気持ちを解き放つ経験が得られるかもしれません。

また画宣紙は、墨が紙の繊維に入ると、次の筆が通っても紙のうえて混じらない性質があります。4歳児クラスで水墨をすると、なかにはグルグルと殴り描きのようにして描く子がいます。墨でまっ黒になり、一見すると線も何も見分けがつかなくなってしまうのですが、不思議なことに水が乾くと線の形が現れてきます。水彩では線と線が混じり合い、色も濁ってしまいますが、そうならないところが墨と画宣紙の面白さです。

ちなみにそのグルグル描きの子は、鑑賞のとき、ぎょろっとした目の龍が暗い背景から出てくる絵が気に入っていたので、その暗い色に反応した

のかもしれませんが。殴り描きが好きだったところに、暗い背景のある水墨画と実際の墨体験が重なり表れた行為・表現だったのかもしれませんが。いずれにしろ、「鑑賞＋造形」によって元気いっぱいの作品が生まれました。

このような画材や技法の特徴を活かすと、年齢に応じた面白い造形活動ができるのではないのでしょうか。「レシピ2 絵と絵をつなげてお話をつくろう」は、絵にお話をつけて自分だけの絵の本をつくれます。「レシピ3 マティスの作品鑑賞でつくる絵」では、カラフルな紙を切って表したマティスの作品を鑑賞した後、同じようなやり方で絵をつくってみます。「レシピ5 透明水彩で色あそび」では、少し上等な水彩絵の具と画用紙を使って描きます。子どもたちにとって、より多彩に「鑑賞＋造形」体験が広がっていくはずです。

いことや個性的な表現をしているのを知り、「おしゃべり鑑賞」で、自身の関心とつながる表現の刺激を得る。美術館で鑑賞ができない場合も、掛図を使うなどしてぜひ試みていただけたらと思います。

(もり よしのり)

5.どのような制作のときでも

「鑑賞＋造形」の活動は、ここに掲げたレシピだけでなく、どのような制作のときでも工夫して取り入れることができます。森本裕子先生の発展的な実践、「『人』をテーマに 夏まつりに『わくわくタウン』をつくろう」は、人を表した作品を鑑賞し、掛図のなかから選んだお気に入りの「人」が、どんな家に住んでいるのか想像し、夏祭りの「わくわくタウン」につなげました。

もちろん「鑑賞＋造形」の鑑賞から制作へとつながるプロセスは、一人一人の子どもによって、また題材や画材、表し方によって異なるはずです。しかし、だからこそ可能性は「無限大」に広がっていくように思います。大人（作家）もいろいろと面白